

## 村井琴山と亀井南冥の事績と墓所

黒川 達郎

古訓堂黒川クリニック

(はじめに)「肥に椿寿あり，筑に南冥あり」と称せられる村井琴山と亀井南冥は，肥後熊本と筑前福岡生まれで，漢方医として学成った後は生地に戻り，診療と教育に活躍した。今回日本医史学会が，九州で開催されるにあたり，琴山と南冥の事績をまとめ，墓所を紹介したいと思う。両者は同時代を生き，交流もあり，お互いに認める存在であったが，晩年の境遇は琴山の明に対し，南冥は暗の人生をたどる。二人には相似と相異の部分があるが，特に性格の相異に焦点をあて，晩年の人生の明暗を分けた要因について考察した。

## (村井琴山)

琴山は熊本医学校再春館教授村井見朴の長男として享保十八年(1733)に肥後熊本に生まれた。22歳で吉益東洞の『医断』を読み，父が失明後は再春館の講席に上がった。29歳で見朴没後，琴山は再春館を去り，上京して初め山脇東洋の門をたたき，そして東洞にめぐりあう。数ヶ月東洞のもとで修業し，その後一旦帰国し，明和六年(1769)再び上京して東洞に師事した。ついには東洞門中，第一人者と称せられるまでになる。帰郷後，九州各地に傷寒論を説いて廻り，50歳をすぎて肥後藩は琴山を医官待遇にあげ，俸禄百石を給した。文化十二年(1815)83歳で死去。琴山は自分の論は立てず，東洞説を広めることに専念した。著書に『医道二千年眼目篇』、『和方一千方』などがある。墓は熊本市の春日萬日山に，父村井見朴，長男村井樵雪ら一族の墓とともにある。

## (亀井南冥)

南冥は筑前福岡姪浜村に寛保三年(1743)に生まれ，任侠の儒医として知られる。父聴因は村医だが，百姓に区分けされた。14歳で肥前国蓮池の学僧大潮に師事し，次いで京都に行き，東洞の門に入るが，数日でその医説の偏僻を疑い，「英雄人を欺くものなり」としてその門を去る。大坂で永富独嘯庵の門に入る。独嘯庵の『漫遊雜記』に請われて名文の序文を書くが，このとき20歳で，いかに学識が傑出していたかわかる。まもなく帰国し，福岡城下唐人町で開業する。南冥の学識は肥筑だけでなく，豊前にまで行きわたり，九州の徂徠学派の重鎮となる。36歳，医術，学問ともに令名が高く福岡藩は南冥を士分に取り立て，西学問所の教授に任命した。寛政4年(1792)50歳で中傷などにより退役処分，終身禁足になり，晩年は，精神に変調も来たした。文化十一年(1814)出火により死去した。享年72歳。傷寒論一辺倒でなく，その短を後世方で補う，まさに医は意なりの方針であった。南冥には『古今齋以呂波歌』『南冥問答』『弁惑論』などの著書がある。墓は福岡市執行の浄満寺に，一族の墓と一緒にある。

(まとめ)晩年の琴山と南冥の人生は好対照である。琴山は趣味が多く，叢桂園という別荘も持ち多くの文人と交流した。琴は七弦琴を弾くほどの名手であった。一方，南冥は猛虎のように激しい性格で，東洞に会って反発したのも，このような性格によるものであろう。一方，南冥は極めて人を愛する人なりと評され，教育を得意とした。真偽は明らかでないが，志賀島の金印の鑑定書を書いたこともあり，緊張とストレスを強いられる晩年であったと考えられる。「性格が運命を変える」と司馬遼太郎は言い遣したように，琴山と南冥の境遇の差には，性格の違いも大きく影響していると考えられる。